ベーテルの設立経緯や理念を知ることができるパネル展＝28日午前、静岡市葵区の市役所市民ギャラリー

独、てんかん患者ケア施設から発展

「ベーテル」福祉理念紹介

設立150年、静岡でパネル展

てんかん患者のための医療福祉施設から発展し、現在は町規模で福祉に取り組むドイツ北西部ビーレフェルト市の「ベーテル」の150年の歴史を伝えるパネル展が28日、静岡市葵区の市役所市民ギャラリーで始まった。3月6日まで。

ベーテルは、産業革命下に病気の特性から社会になじめないてんかん患者のために、教会などが中心となって、古い農家の建物で患者の生活を支えたのが始まり。治療だけでなく、教育や就労など包括ケアを目指した。

てんかん患者のみならず障害者や高齢者、生活困窮者らへと対象を拡大し、2017年に設立150周年を迎えた。一帯に病院やホスピス、学校、職業訓練施設などが建ち、年間23万人以上のケアをし、約2万人を雇用しているという。運営の一部は寄付金が充てられている。

パネル展は、開設の経緯や障害者らの日常が分かる写真のほか、てんかん患者らの芸術作品が並ぶ。ドイツと日本の関係団体が主催し、全国を巡回する。3月7～14日には、国立病院機構静岡てんかん・神経医療センター（同区）に展示する。

無知の知「てんかん」という現実

県内現場にも浸透

ドイツの「ベーテル」の取り組みや理念は、日本国内でも注目され、てんかん診療を含む医療・福祉の現場で生かされている。

国立病院機構静岡てんかん・神経医療センター（静岡市葵区）は、前身の国立療養所静岡東病院当時から医師らがベーテルを訪ね、患者の包括ケアを病院運営に取り入れてきた。

1月にもベーテルを訪れた井上有史院長は「障害者らが当たり前に生活できる環境は、障害や病気を持たない人にとっても暮らしやすいようだ」と話す。

センター周辺では、地域住民や団体が「麻機遊水地保全活用推進協議会ベーテル麻機部会」として、自然環境を生かして障害者との共生を進める活動に取り組んでいる。

1993年には天皇、皇后両陛下がベーテルを訪問され、その後、現地に日本庭園が造られた。庭園のメンテナンスは障害者が行っているという。

（「無知の知」取材班）